

私の人生を変えたイラク戦争

前レバノン大使
天木 直人

道

■いまから一年余り前、私は外交官であり官僚であった。その私は米国のイラク戦争の不正義を目の当たりにして、日本は米国の間違った戦争を支持してはならない、と小泉首相に意見具申し、その結果外務省を追われた。

■組織を離れ一人になった私の人生は180度異なったものになった。全国各地に講演に訪れ、平和を願う人たちとめぐり会うことになった。行脚を続けていくうちに日本の姿が見えてきた。この国は、国家という圧倒的な権力に従順な人たちと、その権力に抗ってまでも個人の尊厳を貫いていこうとする人たちに、二分化されつつある。そして前者がますます増えていっている。小泉首相の高い人気を考えれば、国民は彼の強硬な政治姿勢に反対できないようになってしまったかのである。それでも必死でこの国の良心を守っていこうと頑張っている人がいる。そこに私は希望をみる。私は、そういう人とともに、これからの人生を歩みたい。

■小泉首相は歴代首相のなかでも、ひととき強権政治の人である。その小泉首相がこれまた歴代首相のなかで、もっとも米国に追従した外交を繰り返している。しかも、その米国の大統領が「武力のみが唯一の問題解決の手段である」と信じて疑わない新保守主義者（ネオコンサーバティブ）に取り込まれたブッシュ大統領である、というのも不幸なめぐり合わせである。

■ブッシュ大統領は、歴史的な9.11事件をきっかけに、先制攻撃という禁じ手を正当化してイラクに戦争をしかけた。共産主義という敵をなくした米国は「テロとの闘い」という終わりのない戦争をでっち上げ、倒産しかかった軍需産業をよみがえらせた。極東における日本の安全保障のための日米安保条約であり在日米軍であったものが、いまでは米国の世界的戦争を支援するための一方的な軍事協力にすっかり変化しようとしている。そしていまでは、イラク人を敵に回した侵略戦争に加担するまでに至ってしまった。これがあの太平洋戦争の惨禍の反省にたって誓った不戦の国日本の本来の姿であろうか。二度と過ちを繰り返さないと決意した日本人の望んでいたことであろうか。そうではあるまい。戦後日本はあまりにも平和に恵まれすぎていた。世界でも例のないほど平和であった日本は、その幸運が日米安保条約によるものであったのか、平和憲法であったのか、いまあらためて真剣に考えるときにきている。

■毎日のようにパレスチナ人が殺されている現状を見るがいい。イラクで捕虜の虐待が平然と行われてきたことを、いま一度思い起こせばよい。戦争は人の心を破壊する。その戦争を自らの経済利権の手段として利用しなければ国が成り立たないようにしてしまった米国の実態を直視すれば、答えは明らかである。「ブッシュ大統領は善意の人である」といまでも言い続ける小泉首相に、これ以上日本を任せるわけにはいかないのである。